Ⅱ　習熟度別学習と教育課程

6　習熟度別学習を構想する教育課程編成の基本方針は、どうあるべきでしょうか。

1　発想の転換をふまえた新教育課程の共通理解

学校の課題は，教育目標によって解決の指針が与えられます。教育目標は，例えてみれば，舟の羅針盤に当たるものでしょう。教育課程編成の仕事は，ここから始まります。つまり、生徒の実態，地域の実態の把握によって，教育目標の重点化が行われます。この重点化によって，教育課程の基本方針が打ち出されてくるわけです。

そして，この時点での教師間の共通理解ほど大切なものはありません。仮りに，教師が，教育課程の編成に参画するという自覚がないまま，編成方針が決まったら，教育の効果は不十分なものに終わるでしょう。なぜなら，教育課程は，学校の教育活動の全体計画だからです。

その共通理解も，新教育課程に向かって，教師の発想の転換をふまえた上でのものでなければなりません。高校教育は，こういう教師の姿勢からのみ，その改善の道が開かれるでしょう。

2　一人ひとりの学習を成立させる教育課程の編成

次に，教育課程の全体構想の中に，学習の個別化、わけても，「習熟度別学習が必要だ。」という観点で，教育課程の基本方針を立てる場合を考えてみましょう。そのためにはまず，生徒の学習の欠陥，またはつまずきの診断をして，一人ひとりの学習のつまずきを押さえた個別学習や，習熟度を押さえた習熟度別学習，場合によっては，モジュール方式など，自校の実態に即して可能な教育課程編成の工夫が必要です。また，指導法別学習，教材群別学習等が行えるような教育課程の工夫も大事でしょう。